

使徒の働き2章1-13節 「聖霊の降臨」

1A 聖霊の満たし 1-4

1B 五旬節 1

2B 激しい風と炎 2-3

3B 他国のいろいろな言葉 4

2A 巡礼者の驚き 5-13

1B 敬虔なユダヤ人 5-6

2B 世界離散の出身地の言葉 7-11

3B 驚きと嘲り 12-13

本文

使徒の働き 2 章に入ります。主が、使徒たちに聖霊の約束を受けるために、エルサレムに留まっていなさいと命じられ、そのようにしていました。そして、事実、聖霊が降られます。

1A 聖霊の満たし 1-4

1B 五旬節 1

¹五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。

時が、「五旬節の日」です。ユダヤ人の祭りの時に、聖霊が降られたということには、とても大きな意味があります。まず、ユダヤ人たちが、イエスが来られて、この方が自分たちのメシアであることを知るのに祭りが、それを証していることを知る必要があります。

過越の祭りから、始まります。イスラエルの民が、エジプトで奴隷であったところから、主が連れ出してくださいました。その時に、イスラエル人の各家庭で子羊を用意して、それを屠り、種なしのパンと共に食べて、それでファラオが彼らを強いて、出て行かせました。そして、紅海が分かれて、戻った海にエジプト軍が死に、それでイスラエルの民は贖われたのです。その、子羊の流した血ですが、それを門柱と鴨居につけて、その血を見た御使いは、神の災いを過ぎ越して、エジプト人の長男や、家畜の初子を打っていったのです。このことを思って、バプテスマのヨハネはイエスを見た時に、「見よ、世の罪を取り除く、神の子羊」と叫びました。事実、主イエスは、過越の祭りの時に、十字架につけられて死なれたのです。

そして、レビ記 23 章によれば、その三日目に、大麦の収穫の初穂を主に献げる、初穂の祭りがあります。その時に主イエスは、三日目によみがえられました。

そして、この初穂の祭りから七週を数え、その翌日が五旬節です。イスラエルの民は、エジプトを、第一の十四日に過越の祭りを守り、出エジプト記 19 章によると、第三の新月の時に、シナイの荒野に入っています。ちょうど、五十日経った時です。その時に、主が天から火や雷、角笛の音などと共に降りてきて、民に十のことば、十戒を授けます。それで、ユダヤ人の人々は、五旬節にはモーセの律法の朗読をします。さらに、後の歴史で、モアブ人ルツが、姑ナオミについていき、ベツレヘムで落穂拾いをしていました。それが大麦の収穫から小麦の収穫の時にかけてです。五旬節は、小麦の初穂を神に献げるのですが、ルツ記もシナゴークで朗読するのです。

レビ記 23 章に、例祭と呼ばれる、例年の、主への祭りが列挙されています。過越の祭り、それに付随して、種なしパンの祝い、初穂の祭り、五旬節、そして秋の祭りの三つが列挙されています。そこで五旬節において、何を主に献げるかの指示も与えられています。15 節から 22 節まで書いてありますが、15-17 節だけ読みます。「15 あなたがたは、安息日の翌日から、奉献物の束を持って行った日から満七週間を数える。16 七回目の安息日の翌日まで五十日を数え、あなたがたは新しい穀物のささげ物を【主】に献げる。17 あなたがたの住まいから、十分の二エパの小麦粉にパン種を入れて焼いたものを二つ、奉献物としてのパンとして持って行く。これは【主】への初物である。」興味深いことに、種なしのパンの祝いでは、パン種はその地から取り除きなさいと、主は命じられたのに、ここではパン種を入れたパンを奉献するように命じられています。しかも、二つ用意するように、命じられています。

この日に、聖霊が降られたのです。過越がキリストの十字架、初穂が復活、そして五旬節で聖霊が降られるという、ユダヤ人の祭りには主キリストのお働きが証しされているのです。

2B 激しい風と炎 2-3

² すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。³ また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。

聖霊が降ってこられたことにともなう、しるしです。まず、「天から突然、激しい風が吹いて来たような響き」とありますが、風は、ヘブル語では「霊」と同じです。風も息も霊も、同じヘブル語です。主がアダムを土地の塵から造られて、息を吹きかけて、アダムは生きる者となりました。同じように、イエスは弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい。」と復活の日に言われていました。ニコデモに対してイエスが語られた時に、「ヨハ 3:8 風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのか分かりません。御霊によって生まれた者もみな、それと同じです。」と言われました。風が吹くと、そこには御霊が働いておられることが分かるのです。

その響きがあった後に、「炎のような舌が分かれて現れ」とあります。ヨハネが、「聖霊と火」によって、イエスがバプテスマを授けると言っていました。(マタイ 3:11) ユダヤ人にとって、火や炎の

現れは、聖なる神が天から降って来られたことを思い出させるものです。先ほど話しましたように、五旬節にはユダヤ人は、律法がシナイ山で与えられたことを覚え、律法を朗読します。そしてシナイ山で主が火の中で現れたのを見ました。「出エジ 19:18 シナイ山は全山が煙っていた。主が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。」そして、覚えていますか、エリヤが、イゼベルから逃げて、シナイ山まで行った時に、そこで「激しい大風」があり、地震があり、そして、「地震の後に火があった」とあります（I 列王 19:12）。

3B 他国のいろいろな言葉 4

⁴すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

エルサレムには、祭りを守るために世界中に離散しているユダヤ人が集まっていますが、彼らの住んでいる国々の言葉で語っていました。自分の理解できる言語ではないのに、聖霊によって舌が動き、語るようにするのを、新約聖書で「異言」と呼びます。ここには、どのような意義があるのでしょうか？主が、何をもって、このしるし与えられたのでしょうか？

ところで、異言は、ここ一回だけの奇跡ではありません、使徒の働きにおいて、聖霊のバプテスマを受けた人々の中で語り出すしるしであるし、パウロはコリント第一 12 章から 14 章にかけて、異言の賜物について多くを語っています。ですから、今日の教会にも与えられた、御霊の賜物の一つです。他の、激しい風が吹いたとか、炎の舌のようなものが現れたとかは、ここだけの出来事ですが、聖霊のバプテスマの約束と、異言や預言がしばしばしるしとして伴っていることについては、使徒の働きで何度も出てきます。使徒たちの教えにもあります。今もある賜物です。

主が、世界中からユダヤ人が来ていて、彼らとその地方の言葉と、ユダヤ人の言葉であるヘブル語また、ローマ帝国全体で語られているギリシア語のどちらも語ることができ、二か国、三か国を語ることができる中で、このことを行われたのは、やはり、アブラハムに対する神の約束の成就の一貫でしょう。「創世 12:3 地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」主は、バベルにおいて、人々が塔を建てて天に届こうとしてしまったので、言葉をばらばらにされました。ノアの家族から出てきた人々は、一つの民、一つの言葉でありましたが、バベルの事件を境にして、言葉が分かれ出て、民族が分かれ出ました。けれども、主は、新たにご自分の呼びかけ、召しに従って生きるアブラハムから、新たな国民を造られ、その国民によって、あらゆる部族の祝福とすることを定めておられたのです。

イザヤがかつて、このように預言していました。「66:19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、そして、わたしのうわさを聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない遠い島々に。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせる。」使徒の働きには、エルサレムから弟子たちが出て行

って、ユダヤ、サマリア地方へと福音を宣べ伝え、主にパウロの宣教によって地の果てまで福音が伝えられていることが、証しされています。けれども、すでに、エルサレムには、広範囲の離散の地からユダヤ人が来ており、それで彼らはそこでイエスを信じたから、パウロの働きだけでなく、そういった回心したユダヤ人の働きもあったことでしょう。こうやって、一気に、福音が諸国へと伝えられていったのです。そのためのしるしとして、今、異言が弟子たちに与えられました。

2A 巡礼者の驚き 5-13

1B 敬虔なユダヤ人 5-6

⁵さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国々から来て住んでいたが、⁶この物音がしたため、大勢の人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、呆気にとられてしまった。

ユダヤ人の男性は、七つの祭りのうち、三大祭りである過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りを祝うために集まるように命じられていました(出エ 23:17)。その時、ローマ時代には、帝国のあらゆるところに、ユダヤ人が散らばって生きていました。

離散の歴史は、アッシリア捕囚とバビロン捕囚から始まります。北のイスラエル王国の十部族はアッシリアによって捕え移され、南のユダ王国はバビロンによって捕え移されました。ペルシア帝国がバビロンを滅ぼすと、一部のユダヤ人は帰還しますが、大勢はそれぞれの地に居残りしました。そして、地中海沿岸を囲む地域と、今のトルコ、それからメソポタミア地方に至るまで、広範囲に住んでいました。それが、「天下のあらゆる国々から来て住んでいた」の意味合いがです。

その彼らが、激しい風が吹いてくる響きによる物音が聞こえたため、集まってきました。そして、自分の国の言葉で、ガリラヤのユダヤ人たちが語るのを聞いたのですから、呆気に取られたのです。けれども、彼らが「敬虔なユダヤ人」とルカが書き記していることに注目してください。神を畏れかしこむユダヤ人たち、という意味です。この彼らは、神を求め、神に仕えている人々であり、その彼らに主がしるしをお示しになったのです。これから、ペテロの福音宣教が始まります。そして、この彼らの心が刺され、悔い改めます。そして、この彼らがエルサレムから、良き知らせを自分の住んでいる地域に携えていきました。

2B 世界離散の出身地の言葉 7-11

⁷ 彼らは驚き、不思議に思って言った。「見なさい。話しているこの人たちはみな、ガリラヤの人ではないか。⁸ それなのに、私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くと、いったいどうしたことか。

彼らは驚き、不思議に思っています。ガリラヤの人たち、自分の生まれ育った言葉を話していま

す。ガリラヤ人と言ったら、「イスラエルの片田舎」という意味合いも含まれています。無学の者たちということです。それに、マルコ 14 章 70 節で、ペテロの語ることばが、ガリラヤの訛りがあるので、それでイエスの仲間だと指摘して、ペテロが知らないと否定した場面があります。ガリラヤ人は、その訛りの特徴を隠せなかったのでしょうか。ところが、見てください、流暢に語っているのです！

思えば、驚き、不思議に思うということは、イエスの宣教にある特徴でした。人々は、「マルコ 2:12 こんなことは、いまだかつて見たことがない。」と言っていました。驚きから驚きの連続でした。驚きと不思議は大事です、そこには神が介入しているからです。聖書で、「不思議な助言者」と呼ばれたのは、まさしくメシア、イエスでありました(イザヤ 9:6)。不思議というのは神の領域であり、人のわざや人の知恵によるものではありません。

聖霊の働きや導きは、私たちがコントロールできるものではありません。いつも、思いを超えたところにある新鮮さ、喜び、驚きがあります。異言の賜物は、その代表例でしょう。

⁹ 私たちは、パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントスとアジア、¹⁰ フリュギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビア地方などに住む者、また滞在中のローマ人で、¹¹ ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。それなのに、あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは。」

ユダヤ人の離散を具体的な地名で確認できます。まず、メソポタミア地方とさらにその東方から来たことを言っています。「パルティア人」は、イランの北部地域にパルティアという国がありましたが、その人々です。そして、メディアもその近くの地域であり、エラムは南部です。ペルシアの首都スサも、エラムにありました。そしてイラクや今のトルコ東部のところがメソポタミアです。ティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域です。

そして、ユダヤとありますが、エルサレムのすぐ周りの地域です。それから今のトルコ全体にある地域の人々を列挙しています。カパドキアはトルコ中部にありますが、あの有名な観光地カッパドキアのことです。ポントスはカッパドキアの北にあり、黒海に面しており、アジアは西トルコにあり、エーゲ海に面し、黙示録の七つの教会はそこにあります。フリュギアはアジアの東隣、パンフィリアはフリギアの南、地中海に面しています。それから、一気に北アフリカの地中海に面する地方を挙げています。エジプトとクレネです。クレネは、今のリビアにあります。ここもローマ帝国が征服しており、イエスの十字架を途中で担いだシモンは、クレネ出身です。そしてローマ帝国の中心、ローマからのユダヤ人もいます。ローマ人への手紙をパウロが書きましたが、そこは彼の始めた教会ではなく、すでに立てられていましたから、ここにいたユダヤ人が初めに福音を伝えた可能性があります。

これらの地域に、ここで回心したユダヤ人の一部は戻って行ったことでしょう。そして、使徒たちもそういった地域を巡回し、シナゴグに行き福音を伝え、また、建て上げられた、異邦人も含まれる教会に巡回に行きました。使徒の働きでは、パウロの一行が今のトルコを巡った記録がありますし、ペテロ第一を見ると、「1:1 ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち」とありますから、ペテロもこれらの地域を訪問していた可能性があります。実に、当時はトルコの一割がユダヤ人であったとされています。

さらに、血統としてユダヤ人ではない、改宗者もいることも言及しています。「¹¹ ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。」と述べていますね。改宗者とは、異邦人だけでもモーセの命じる割礼と律法を守ることによって、ユダヤ教徒になった人々のことです。クレタとは、地中海に浮かぶクレタ島で、アラビアは今のヨルダンの南部から南を指していて、ヨルダンのペトラも、かつてはアラビア地方に含まれていたのではないかとされています。彼らは必ずしも血統的にユダヤ人ではなく、改宗者だったのかもしれませんが。そうすると、さらにペテロの語る福音の対象は広がります。肉によるユダヤ人だけでなく、異邦人も含まれるということです。ルカも、もしかしたら改宗ユダヤ教徒ではなかったとも言われますが、彼らは、福音を異邦人に伝える橋渡し役を担う人々になっていきます。

ところで、彼らは「神の大きなみわざを語る」と述べています。福音を語る時は、ユダヤ人が当時語っていた、ヘブル語、あるいはアラム語とも言われていますが、それを語ったのであり、異言においては神の大きなみわざを語っていました。コリント第一 14 章においても、「14:2 異言で語る人は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊によって奥義を語るのです。」とあります。預言は人に語り、異言は神に語っています。

異言の解き明かしの賜物がまた別にあり、解き明かしがあれば、聞いているが理解することができるので、人の徳を高めることとなります。それでパウロは、解き明かす人がいない時は、公の集まりでは異言で語るのを控えるように、一人で祈り、賛美する時に用いることを勧めています。私たちの教会でも、公の礼拝において異言を語っていないのはそのためです。コリント第一 14 章にある使徒パウロの指針に基づきます。私的な場で、また信者が集まって、互いに信頼している中であれば、異言を語ることは許されます。

3B 驚きと嘲り 12-13

¹² 人々はみな驚き当惑して、「いったい、これはどうしたことか」と言い合った。¹³ だが、「彼らは新しいどう酒に酔っているのだ」と言って、嘲る者たちもいた。

人々が驚く時、それは神をほめたたえる、あがめるか、それとも、嘲るかのどちらかになるでしょう。イエス様が奇跡を行われた時、多くが神をあがめましたが、それでも信じないで拒んだ人によ

る、中傷が始まりました。嘲る人は必ずいます。次にペテロは、この嘲りをむしろ利用して、福音を語り始めるのです。

こうして見ていきましたが、改めて、聖霊のバプテスマと、それに伴った異言についてお話したいと思います。一つは、聖霊のバプテスマはここで起こった出来事の一回性のものではないことです。そこで起こったいろいろな現象については、ここ一回限りのものもありますが、使徒の働きで、聖霊のバプテスマを受ける場面が何度となくあります。そして、もう一つは、異言のしるしが現れましたが、それも一回限りのものではなく、他の時にもあることです。聖霊のバプテスマを受けた人々が、しるしとして異言や預言が与えられています。そして、主がマタイ 16 章で、宣教命令にもなうしるしとして異言を教え、また、使徒たちも手紙で教えていますから、今も異言の賜物があるのです。しかし、三つ目は、すべての人が異言を語るわけではないし、聖霊のバプテスマを受けるのも、人それぞれの現象があるということです。

大事なのは、信仰をもって聖霊を求めることです。いろいろな御霊の現れがあります。一定の型に当てはめるのではなく、信仰をもって求め、信仰をもって聖霊を受けます。